
はつこい

紫華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
はっこい

【Nコード】
N0513L

【作者名】
紫華

【あらすじ】
ずっと好きだった。

でも臆病な私はこの関係を崩したくなくて……………。

私の実話とフィクションを混ぜました。

どこまでが実話でどこからがフィクションなのかは言えませんが

.....
o

ずっと……

私が名前を呼んだらきつとめんどくさそうに振り向くんでしょう？

「舜くんっ!!」

ほら、ね？

やっぱりそうだ。

「……………何？」

聞き慣れた声。

でもその声で私の名前を呼んでくれたことはなかったよね。

本当は、呼んでみてほしかった。

「あのね。気づいてたかもしれないけど……………。ずっと舜くんが好きでした。」

返事は期待してない。

だって貴方の隣にはあの子がいるもの。

ひねくれてる私なんかとは比べものにならないほど可愛いあの子が。

なに？

そんなびつくりしなくても。

そんな顔もかっこいいって思う私はもう末期なのかもね。
自然と笑いがこぼれた。

出会い

私が舜くんを初めて見たのは、1年の時。
でも話したことはなかった。

初めて話したのは2年の5月。
クラスで何故かジエンガが異常なほど流行った時だった。

「月城もジエンガやらね？」

仲のいい男友達にジエンガに誘われた。

「ジエンガ？いいけど。なんか最近流行ってるよねー。どうしたの？」

「ああ、舜が持ってきたんだよ。んで、皆ハマりだしたわけ。」

あんなかさばるものをわざわざ？
変わった人もいるんだ……。

それが舜くんに対する第1印象。

「でも舜しか持ってねえんだよな。月城借りてきてくんね？」

「は？なんで私が？やろうつて言ったの悠じゃん。」

「いいからいいから。」

こいつムカつく。

何様のつもり？

「わかった、ジュース1本奢りで。」

そう言って私は隣の教室に駆けていった。
後ろで悠がなんか言ってるけど知らん。
人を使うのが悪い。

「あ。」

隣の教室に入っただいいけど、私舜？って人のこと知らないや。

「ちょこー！ー！ー！」

「きゃっ。ひーちゃん？」

私が体当たりをして抱きついたのは、オカモトチヨコ岡本千陽子。
私はちょこって呼んでる。
ちっちゃくって可愛いの。

「ねえねえ、舜って人どれ？」

「大谷くん？大谷くんならあの人だよ。」

ちょこの指さした方を見れば、軟体生物。

「え？あの軟体生物が？」

「軟体生物って……。相変わらず酷いね。」

「なにかおっしゃいました？」

「ううん、なんにも。」

そんな焦って首振ってたらバレバレだって。
ほんと、嘘下手なんだから。
ま、そこが可愛いんだけどね。

「ねえその大谷舜！！ジエンガ貸して？」

私は軟体生物に向かって話しかけた。

そしたら軟体生物は体を起こした。

……………うわ、何こいつ？みたいな目で見られたよ。
あ、もしかして。

「私のこと知らない？」

そうだよ、知らない人からフルネームで呼ばれたらそりゃびっくりするよね。

「や、知ってるけど…………。悠とかとよく騒いでる奴だろ？」

なんかその認識嫌だなあ。

なんであいつらと同類設定なのよ。

「んー、その認識は嫌だけどまあ大して間違っではないね。私は月城陽菜。よろしくね。」

「おう。俺はご存知の通り大谷舜。……………よろしく。」

その間が気になるけどあえてつっこまずにいきましょうか。

「で、大谷舜ジェンガ。」

私はそう言って手を差し出した。

「なんか商品名みたいじゃね？舜でいいよ、皆そう呼び出し。」

大谷舜はジェンガを渡しながら言った。

それもそうか。

でも最初から舜はなあ。

じゃあ…………。

「最初から呼び捨ては苦手なんで、舜くんで。」

そう言ったら大谷舜…………じゃなくて舜くんはちょっとびっくりした
みたいな顔をした。

ん？

なんかおかしいこと言った？

ま、なにとはともあれジェンガ手に入ったし、帰るか。

「じゃあねー。」

私はヒラヒラと手を振って自分の教室へと帰った。

もちろん悠にはジュースを奢らせましたとも♪

出会い（後書き）

うーん、文才ないなあ。

読みにくかったり誤字脱字あったらご指摘くださいね。

ねえ

「ちょっとー！ー！ー！ちよこで……じゃなくてちよここと遊びにきたよー！ー」

「今あたし《で》って言ったよね？！」

ちっ、気づかれたか。

「え？なんのこと？陽菜ちゃんわかんない。」

必殺 とぼける！！

「もういいよ、諦めた。ひーちゃんには何言っても無駄だもんね……。」

さすがちよこ。

学習能力が高い♪

私はちよこの頭を撫でた。
あー癒される。

かわいすぎでしょ、この小動物。

「あー!!」

軟体生物みつけ♪

机にべたーってして寝てる。

いつつも寝てるよね。

今日天気いいから仕方ないかもしれないけどさ。

あ、そうそう軟体生物もといて舜くんの席は窓側の一番後ろ。
いいよね。

授業中寝ててもバレにくいし。

私の席なんか一番前。

すぐバレちゃう。

「地震だぞーー!!」

そーっと近づいてから舜くんの机をガタガタ揺らしてみる。

「……………何？眠いんだけど。」

うつわ、超目つき悪い。

睨んでる。

そんなに寝てるの起こされるの嫌なのかなあ？

あ、でも……………。

「寝起きの顔かわいいんだね。」

あれ？

顔真っ赤だ。

どうしたの？

「どした？」

私が尋ねたら、なんでもないって言って机に突っ伏した。
なんか悪いことした気分。

私は傍若無人の代名詞なはずなのに。なんで？
なんで舜くんには悪いことした気分になるの？

今になって考えたら、もう既に好きだったのかもね。

ねえ（後書き）

これほぼ実話です（笑）

あ、といっても舜の立場にいた人が好きだったわけじゃないですけど（^ー^；）

この『舜』って人は、私の色々な友達＋想像でできてます。

家（前書き）

暗いです、重いです。

家

私は家が嫌い。

家族なんか大嫌い。

妹を除いて。

私には妹が2人いる。

鈴と彩夏だ。

鈴は小6で彩夏は3歳。

その2人を除いた家族……つまり父親と母親が私は大嫌い。
死ねばいいのと思う。

私の母親は私が幼い頃に離婚した。

そして再婚した。

だから、今の父親は義理の父親で、彩夏とは父親が違う。

でも、あの男は。

最低だ。

私を娘としてじゃなくて、女として扱う。

実際、何回か襲われかけた。

今のところは防げてるけど。

わけがわからない。

そして母親。

昔は優しくった。

でも最近は暴言ばかり。

これって精神的虐待じゃない？って思うんだけど…………。

「ちょっと、陽菜！！なにやってんのこのグズー！」

いったあ。

殴られた。

痣できたらどうすんのよ。

学校じゃ明るく振る舞ってんのに。

「あんななんかこの家の癌なの！！さっさと出ていけ。あんなんか産むんじゃないかった。」

なんでそんなこと言うかな。

そんなこと言ったら私だってあんなの子どもになんか産まれてきたくなかった。

「あんたは社会のゴミ。人様に迷惑かける前にあたしが殺してやるのか？！」

……………殺してくれるの？
むしろ頼みたいんだけど。

「あんたは誰にも必要とされてない！！さっさと死ね！！」

親が子どもにそんなこと言う？

もう疲れた。

こんな家いや。

死にたい。

誰か助けて。

私の唯一の救いは鈴と彩夏。

私がいなくなったら、かわいいかわいい2人に予先がむくかもしれない。

それは無理。

この地獄を2人に味わわせるなんて。

絶対にできない。

だから。

私が我慢するしかないんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0513/>

はつこい

2010年10月8日21時16分発行